

研究

申年の鯨の大漁

中浦湾での漁の歴史をたどる

賛助会員 安部 弥 右 衛 門

① 鯨を鯨網でとらうとして

中浦湾は地凹で見ると、佐伯湾の南部に位置し、鶴見半島の中程北側にあり、鶴見町大字中越浦宇土島と羽出浦白崎との間に包含されている入江である。

この湾は岸辺から水深く、網代には海底に岩礁なく、潮流も至って緩慢な好漁場であり、昔は魚群の来遊も多く、鯨をはじめ、鯨・鮪などの漁場として、佐伯九十



九浦中第一であった。

従って昔から漁船の数も至

つて多かつた。享保以前はこ

とは記録がないのでおからな

いが、享保五年五月には家数

三十軒（人数三百三十八）の羽

出浦に

鯨網 六帖（うち片手一帖）

鯨網 四帖

とがあり、この網数は明治年

代まで経営者は変わっても数は

変わらず、中越浦にもまた同数

に近い網があったという。

江戸時代には鯨の豊漁がっ

づき、その運上銀は藩庫を豊かにして、殿様によるこぼれてきたそうである。勿論耕地の少ない村の経済も、漁のみで支えていたことである。

明治維新前後の、中浦湾の漁況は明らかではないが、明治十年代には、毎年のように鯨・鯨・鯨をどの漁船が一ついて、その中でも、古来たちが口をそろえて「申年の鯨」という話をよくしていたが、事実とは思えぬ程の鯨漁があつて、当時大人も子供も、眠るひまもない程の忙しさを、漁獲と製連に、てんてこ舞いをしていたという話である。

その頃の冬、羽出浦の小倉の網代で、羽出、中越有明三浦の鯨網が十二帖集まり、三昼夜の間次ぎに網を曳いて、中には、一帖の網で何下尾という鯨を大漁して、一躍大金持ちになった網元もあつたという。それは確かな事実であり、後の網では、座敷の床の間に、千両箱を十一並べたと伝えられていた。

それは、この日第一番の漁頭になつた、羽出浦の倉の網と呼んだ、吉岡友太郎氏の家であつた。しかしその鯨の大漁が明治何年であつたか、それを知っている人は、ただ一人もいなかった。

筆者がまだ年若い頃、古き方々が折々その当時のことを話し合ひ、又鯨漁があつた時分のことなど話していたが、その話の中によく「申年」「申敷」と言っていたのを聞いていた。

しかし明治十年前後の「申年」といえば、それはいつであつたらうか。明治五年が「申年」に当たり、その次の明治十七年が「甲申」であるが、そのどちらであるか

に困っていたところ、右才たまた次のような文献が手には
いった。

南海部郡沿海漁業の地勢並に漁具一斑
(明治十五年発行)

(前畧)

我郡東中浦地区には、時々数方尾の鯿がよせて来るが、元來この地方ではこれを釣るばかりで、網で引くことを知らない。此の大群を望みて空しく、鯿が停観するのみであつたが、明治年中、坂本徳松、今津音蔵の兩人「いるかぐい」で疲勞困憊にして地方によつて来夫(鯿)を、鯿網でおきまわして、おずか五六尾だごとにかくブリを引いた。

それから何度かやつて見たが、才はしこい鯿が大引網では、ひけるものではない。それで大引網をすつかり「草網」にかえ、総長六百尋、全部「真網」にした。それでだんだん鯿が引けるようになった。けれど大群になると、魚の勢いおたるべからずして、何回か網を千ギンに破られて、これが復旧に資産を蕩尽し、辛酸をなめつつ細々ながら網をつづけていたが、明治十二年大漁があつた。これで借金を返してしまつた。

この経験から、その翌十三年に、今津は網糸に充分草のよいのを遊び、「二三」を「三三」に改めたので、それからほとんど網をつき破られることはなくなつたが、こんどは方という魚になると、魚取りを吹き上げて、その下から逃げるので、「沈子」が軽いとさとり、今まで五十つけた「沈子石」を七十五つけるようにした。

それで今度は容易に袋を持ち上げぬようになつたが、今度は「沈子」を押し沈めて、其の上から逃げて行く。それで従来使っていた桐の「沈子」長さ八寸、中六寸

厚さ三寸のものを、中七寸五分に改め、尚その数を増したので、網の構造も大丈夫になり、一時に一万有餘の鯿を漁し得ることとなり、漸々他浦も亦改良におもむき、大いに漁利をおこした。(後畧)

とあり、右記録によれば、中浦湾で鯿を大量に漁獲するようになったのは、明治十二年以降であり、伝説の小倉網代で鯿の大漁があつた年は、明治十七甲申年ではないかと考えられる。

② 小倉網代での鯿の大漁の状況

聞くところによると、網を引上げた場所が小倉であるが、はじめ鯿の群れをおき廻したのには、敷場の網代であつたというのが実説のようである。(次のページに地図参照)

始め敷場網代で鯿の大群をおき廻したところ、それが起大群であつたので、魚捕りの袋は、それに連続している網を魚群が突上げて、逆網の方へせり寄せてしまつたので、はじめ敷場網代に投げ入れられた網の主体は、ほとんど小倉網代にせり寄せてしまつていたので、このままこの網を、地方に引き寄せようとする逆網平の「中鼻」礁で、網を破るだけでなく、網も寄つて来ないことが明らかであるので、各網船を順次沖合に繰り出し、前かり船は魚の追い込みに懸命になり、網船は無事小倉網代に位置を移して、網を小倉網代に引き寄せる作業に成功した。何分鯿が大群であるので、羽出、中越、西浦の鯿網全部と、有明浦三帖の網船が全部、小倉網代の周辺に集まり、一番網の後を二番網が、その後を三番網が、その次は四番と、このように、先着網の中の魚の状況を観察しては、次ぎつぎに網を入れるので、その操業には相当の時間を要し、全部の網が漁撈作業を終つたのは、三日目であつた。

い連中は、早くも水葎などを手にして振り廻しはじめた。大事の場合に陥んで、思慮あるムツギンや老漁夫たちは、逸る若者と制止して談合を止め、籤引きに着手して定めることにし、抽籤の結果三番網は大黒網、三番網は若我網と決着して漁撈に励んだ。

若我網は三番網であつたが思いの外の大漁を上げたので、みんな元氣一杯で現場から引揚げ、定錨場に帰つて来たが、大黒網の若い連中に暴力で、樽の鏡板を打ち抜かれた。何ともしも心外である。

「よしッ、おの樽を打破つたのは大地下の庄吉だ。庄吉の所に持つて行って、元の通りに修復させてやれ。」

と、若我網でも血の気の多い「タカ旅」の連中が騒ぎ立て、交渉の役に選ばれたのは庄吉程々さんと同年輩で、しかも網親方の近親に当る、敷場の坂本徳治郎という若者であつた。

大衆の意志に背き得ぬ徳治郎青年は、早速庄吉青年を勧板、懇ろに来意を告げ交渉の結果、樽は以前の完全な姿になつたが、面白いことにこの二人の青年は、これが縁となつて、生涯親密な友好関係を保つた。

と、若我網でも血の気の多い「タカ旅」の連中が騒ぎ立て、交渉の役に選ばれたのは庄吉程々さんと同年輩で、しかも網親方の近親に当る、敷場の坂本徳治郎という若者であつた。

また伝説では、この時に漁れた鯿一尾の代価はたつた七疋であつたそう、如何に豊漁であり、如何に金銭の価値が貴い時代であつたかがあかるが、それにしても三貴双(約12疋)内外の鯿一尾が、七疋位で売買されたとはいへないほどの、そんな時代であつた。もつとも其の後十年たつた明治二十七年、出来網が高鳴網代で鯿を

三百匹ほど引いて羽出に持ち帰つたことがあつて、私たちが遊び友達三人がその一尾を貰つたことがある。それと売つて金に代えたが、七十五疋が八十五疋のいざれかであつたので、考えられぬことはない。

(つづく)

資料紹介

鉄道開通式祝賀の歌

相野浦 小野とよさん(よそ)による (紹介 富沢 泰)

去る二月五日、上八津小学校百周年記念のため、記念誌編さん委員会が開かれた。それは大正時代の教育と語る座談会、現職近所教育長岡本藤一郎氏が入津校敷員であつた時代の教え兒八名程を集めて「旧師と教え兒の会」と開いていた。

その席上、当時の生徒小野とよさん(今七〇才)は、入津校の先生であつた高司アサ先生(明治村植松、尺間神社宮司高司家の人、のち清原善太郎先生と縁がなされる)に「れられて、大正五年十一月、日の佐伯駅の鉄道開通式を見物に出かけた。

初めての新、しかも汽車が塵をばいて走る開通祝賀の歌も、相野浦から一歩もよそに出たことなかつた田舎の一少女にとっては、驚きだつたにちがいない。歌の構内を埋めていた人々と共に、小旗を振つて汽車を迎えたことだろう。その日の祝賀の旅行列に歌われた鉄道開通の祝賀唱歌を、小野とよさんは全部おぼえていて、美しい声で歌ってくれたのである。

ふし(歌曲)は「汽笛一声新橋を」の鉄道唱歌である。全文を紹介しよう。

- (一) 御代の栄えのいぢじりく あふるる露のみめぐみに
九十九瀬もうるおいて 通いはじめし汽車の道
- (二) 十歳のおまり待ちわびし 望みもとげて秋涼し
いでや歌わんもろ共に にきわう今日のうれしさを
- (三) 蒙九州の豊かくに 鐵路の長さ百哩
臨階のたより整いて 今日日千里もたは比隣
- (四) 大正五年菊月の 秋の日高く気はすみて
よるこびみてる鶴城下 幸いながし扇丘川 (かわり)